

更級日記を調べる

2022年12月25日

我部山民樹

1. はじめに

この11月28日、加賀美幸子氏の講演「『更級日記』の魅力」を聴講したが、予備知識が乏しく、理解できないことも多かったので『更級日記』について調べてみた。

『更級日記』は平安時代の中頃、上総国（現在の千葉県市原市）で10歳から13歳まで暮らしていたとされる、菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）の回想録である。作者は菅原道真の5世孫にあたる菅原孝標の次女で、母親の異母姉は『蜻蛉日記』（かげろうにつき）の作者の藤原道綱母（ふじわらみちつなのはは）である。

作者が13歳（数え年）のときの1020年から、52歳の1059年ごろまでの約40年間に綴られている。全1巻。『蜻蛉日記』『紫式部日記』などと並ぶ平安女流日記文学の代表作の一に数えられる。江戸時代には広く流通して読まれた。

東国・上総の国府（市原郡（現在の千葉県市原市）にあったとの記録が残されているが、その位置は特定されていない）に任官していた父・菅原孝標の任期が終了したことにより、1020年9月に上総から京の都（現在の京都市）へ帰国（上京）するところから起筆する。『源氏物語』を読みふけり、物語世界に憧憬しながら過ごした少女時代、度重なる身内の死去によって見た厳しい現実、祐子内親王家（ゆうしなしいしんのう、後朱雀天皇第3皇女、母は中宮・藤原姫子（ふじわらげんし、敦康親王女で藤原頼道養女）への出仕、33歳で橘俊道（たちばなのとしみち）との結婚、子・仲俊らの出産、夫の単身赴任そして1058年秋の夫の病死などを経て、子供たちが巣立った後の孤独の中で次第に深まった仏教傾倒までが平明な文体で描かれている。執筆形態としてはまとめて書いたのだろうと言われている。記憶に頼るだけでなくメモはあったとされる。

○当時の古代道

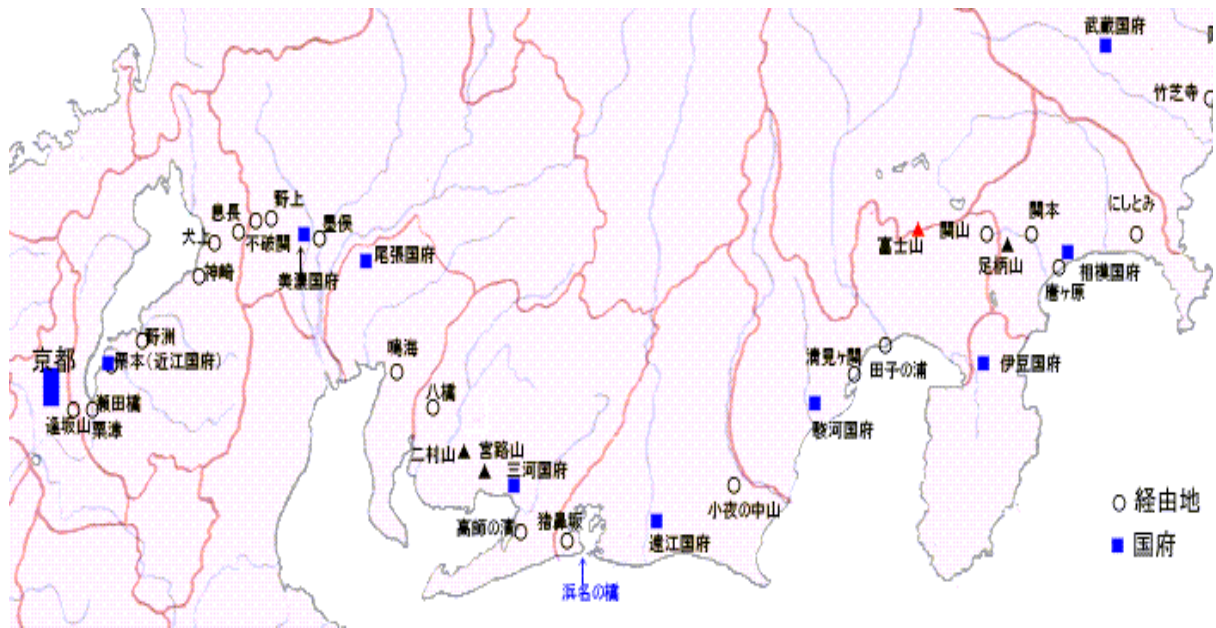




平安後期の関東の古代道

○菅原一家帰京の想定ルート

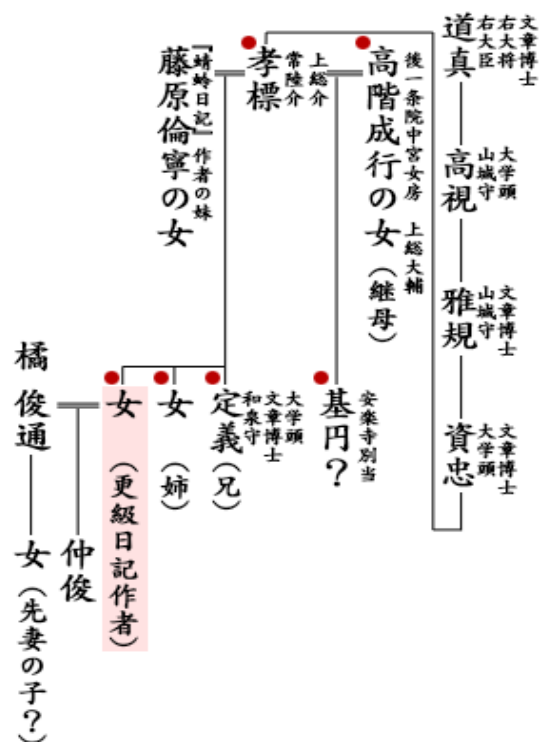




2. 作者のプロフィール

1008年うまれ、本名は不明。『更級日記』の作者として有名。また、『夜半の寝覚』（よわのねぞめ）や『浜松中納言物語』などの作者に擬せられている。大学頭や文章博士を代々努める学問の家柄で、兄・定義もこれらの職に任命されている。また、母方の伯母に『蜻蛉日記』を記した藤原道綱母がおり、父が上総下向に連れそった継母は、後に「上総大輔」（かずさのおおすけ）と呼ばれる歌人であった。このような環境は、菅原孝標女の物語への傾倒に大きな影響を与えたものと考えられる。

(1) 家系図



(2) 家族の紹介

(「菅原孝標の女の更級いちはら紀行」より)

(作者) 私の呼び名は「菅原孝標の娘という意味です。そのままですね。

私の時代、女性が本名で呼ばれることはほとんどなく、父や夫の名や官職名などで呼ばれていました。ですから私も通称でカンベンして家族を紹介するわ



菅原孝標女の銅像
(千葉県市原市、五井駅前)



○父；孝標

私の父です。どんな人かって？ まじめで優しくって、大好きです。あまり切れるタイプではないと思われがちなのは、私の『更級日記』も原因のようで…。父にはちょっと悪いことをしましたね。

たしかに父は菅原家のシンボルである学者職の長官には就けずじまいでした。凡庸だったと言えればそれまでなのですが…。ただ、娘としてちょっとだけ弁護させていただきますと、若くして私の祖父・資忠（すけただ）を亡くしたことが大きな原因だったと思うのです。これから仕官する大切な時期だったわけですからね。

父は私たちが本当に可愛がってくれましたので、単身赴任なんて考えられなかったのでしょう。寛仁元年(1017年)、45歳でやっと国司になると、任地の上総国に私たちも連れていったほどです。その後は都に近い国の長官になることをずっと願っておりました。もし叶えば、私も連れて行くつもりだったのです。しかし60歳まで待ちに待って、ようやく常陸介ですよ。すごく落胆していました。そりゃあ、常陸国は最高ランクの「大国」ですけど、坂東へ下るには、ちょっと歳がねえ…。それに長元5年(1032年)って言えば、「平忠常の乱」終息の翌年でしょう？そういう社会不安もありましたし、父の心境は察して余りあります。「生きて都には戻れない」って覚悟していました。「そんな所に娘を連れて行くわけにいかない」などと言って、一人で赴任しましたが、今思えば、本当は私についてきてもらいたかったのでしょうかね…。出発の時なんか、私を見て泣くのですよ。さすがにもう会えないかと思えてきて…。私は太秦の広隆寺にお籠もりし、「父が無事に帰ってきますように」とお祈り申しあげました。きっと仏様も不憫に思われて、お聞き届け下さったのでしょうかね。父とは4年後に再会することができました。このときはどんなに嬉しかったことか！

○兄；定義

菅原孝標の女) 兄は私の面倒をよく見てくれました。帰京のおり、「まつきとで乳母を見舞ったときも、私を抱いてこっそり連れ出してくれました。私が年をとってからも、ずっと仲良い兄妹でしたよ。大嘗会(だいじょうえ)の御禊(ごけい)の日に初瀬参りに出かける私を、「よりによってこんな日に行かなくても」と腹立てながら止めたっけ。兄は和泉守に就任すると、前任国司の非道による国の疲弊を朝廷に奏上したりしています。常識人で曲がったことが嫌いな性格だったのですね。頭も良く勉強家でしたから、父がなれなかった大学頭と文章博士になり、家業を再興したのです。永承4年(1049年)には、やはり父が望んでいた近国の国司(和泉守)になれたのですよ。嬉しいじゃありませんか。私も兄といっしょに和泉国司館(いずみのこくしやかた)で数ヶ月暮らしましたが、心弾む旅でしたね。

○姉

わたしたちはとても仲むつまじい姉妹でした。姉は読書好きで、上総国司館（館の位置は国府と国分僧寺の近くとされるが、特定されていない）では継母といっしょに、いろんな物語や光源氏のことなどを楽しそうに語り合っていました。二人の会話を聞くにつけ、「はやく都に上って、ありったけの物語を読みたい」と思ったものです。

そうそう、帰京してからのことですが、家に迷い込んだ猫を「飼おう」と言ってくれたのも姉です。姉はこの猫を、お亡くなりになった侍従大納言（藤原行成様）の姫君の生まれ変わりだなんて言い出して、それはそれは可愛がっていました。このような浪漫的な空想も、物語への愛着も、私たち姉妹は似ていましたね。

でもね、帰京後のわが家は、悪い事ばかり続いちゃって、治安3年(1023年)には家が火事になり、愛猫「大納言の姫君」も焼け死んでしまいます。

姉は上総から帰京してほどなく、男の人を通わせるようになりましたが、あまり幸せではなかったのではないのでしょうか。

ある日のこと、二人で夜空を眺め語り合っていると、姉は突然、「私が今、行方もわからず飛び去ってしまったら、あなたはどう思うかしら…」なんて言うのです。私、びっくりしちゃって…。ちょうどその時、隣屋敷に住む「荻の葉」お嬢様のもとに通ってきた牛車がありました。牛車の人はお嬢様を呼びましたが、返事がありません。彼は趣深く笛を吹くのですが、それでも返事がなく、あきらめて帰っていきました。私が

笛のねのただ秋風と聞こゆるに

など荻の葉のそよと答へぬ

(笛の音は秋風のように趣深く聞こえるのに、なぜ荻の葉はそよがない《「はい」と答えない》のでしょうか)

と歌うと、姉は「ほんとにね…」と言って

荻の葉の答ふるまでも吹きよらで

ただに過ぎぬる笛のねぞ憂き

(荻の葉が答えるまで笛を吹き続けようとししないで、そのまま行ってしまった人こそ、つれないのではないのでしょうか)

と答えました。

今思えば、姉は夫に対する不満を詠んだのでしょうか。恋愛経験がない当時の私には、複雑な姉の気持ちをよく理解できませんでした。

翌年の万寿元年(1024年)、姉は子を産んで亡くなりました。姉の言葉は、あまりに悲しい現実となってしまったのです。

○継母（高階成行女）；（たかしなのしげゆきのむすめ、高階成行は三蹟の一人、三蹟とは平安時代の能書家、小野東風（おののとうふう）、藤原佐理（すけまさ）、藤原行成（ゆきなり）の3人を尊崇した呼称）

この人は実の母ではなく、父が上総介になる少し前に結婚した第二夫人です。実の母は近所に出かけるのも面倒がるような人ですから、上総なんて、とてもとても…。しかしいろんな意味で私たちを養育できる母親が必要でしたから、父は継母を連れて上総に下ったのだと思います。

え？二人も妻がいるのはおかしい！？ 今じゃそのようですね。でも当時の貴族社会では、男性が複数の女性と婚姻関係を持つことは普通だったのです。まあ、妻同士の嫉妬は凄いものがありましたけど(その辺は叔母の書いた『蜻蛉日記』を読めばよくわかります)。

皆さんが「ママハハ」って聞くと、何だかつれないイメージを持たれると思うのですが、この人と私たち姉妹はとっても仲良しでした。

私が源氏物語などの世界に憧れ始めたのは、継母と姉の影響でしたし、当時の教養として欠かせない和歌の詠み方もいろいろ教えてもらったっけ。なにせ家を出たことのない実母とちがい、後には後一条院中宮様にお仕えしたキャリアウーマンでしたから。優れた家庭教師でもあったわけです。

上総での生活が終わり、都に帰ってほどなく、継母は5歳になる子連れ、父と離婚してしまいます。

継母にとっては、田舎での生活が我慢できなかったのでしょうか。

それとも実母と仲が悪かったのか？

あるいは、のんびりした父とは性格的に合わなかったのかも知れません。

その頃の私には大人の微妙な関係など理解できようもなく、あまりもの悲しみに泣き暮らしたことを覚えています。でもその後も、和歌のやりとりなどで交際を続けたことは言うまでもありません。

継母は女流歌人としても知られ、『後拾遺集』(ごしゅういしゅう、白河天皇の下命により、藤原通俊が撰進した)に選歌されています。

ニックネームの「上総大輔」(かずさのおおすけ)は、夫だった父孝標の官職に由来するものです。ある日父が、「他の男と再婚したのに、まだ私の官職名を名乗っているのは不都合じゃないか」と言うので、継母と文通している私が、父に代わって抗議の歌を送ったこともあります。

○乳母

当時の貴族社会では、実の母が子に授乳することはなく、乳母の乳を飲ませ養育しました。「うば」とは子供側からの呼び名で、一般には「めのと」と呼ばれません。

信頼できる親しい家来の一族から迎えられるのが普通なので、私の乳母もそうだったのでしょう。

私にとっては実際に育ててくれた優しい「ママ」であり、いつも甘えていまし

た。上総で妊娠しますが、夫を亡くしてしまいます。寛仁4年(1020年)秋の帰京時、下総・武蔵国境にある「まつさと」(今の松戸あたりかしら)で出産しました。当時お産は「ケガレ」でしたから、乳母だけ離れ、別に上京することになったのです。

私、乳母が恋しくってたまらず、一家が「まつさとのわたりの津」の渡河準備を夜通し進めるなか、こっそり抜け出してお見舞いに行ったのです。粗末な荒屋で苦しそうに伏す乳母は、降り注ぐ月光のせいか、こよなく美しく見えました。私の髪をかきながら泣く乳母。とても見捨ててなんて行けないと思いながら、兄に引かれて仕方なく別れました。しかしこれが、乳母との最後の別れになってしまったのです…。

翌年の春、都で流行った疫病で、乳母はあっけなくこの世を去りました。私はショックでひどく泣き暮らし、大好きな物語を読みたいという気も失せてしまったほどです。

散る花もまた来む春は見もやせむ
やがて別れし人ぞ恋しき

(散る桜も春がめぐればまた見られるでしょうに、永遠の別れとなってしまった乳母が、なんと恋しいことか)

(ウイキペディアより)

- 母；藤原倫寧女（ふじわらのともやすのむすめ）
- 伯母；母親の姉で藤原道綱母（蜻蛉日記の作者）
- 夫；橘俊道（たちばなのとしみち）

平安時代中期の貴族。但馬守・橘為義の四男。官位は従五位・信濃守

- 子女

橘仲俊

(3) 更級日記以外の作品

- ・和歌

勅撰和歌集に14首が入っている。

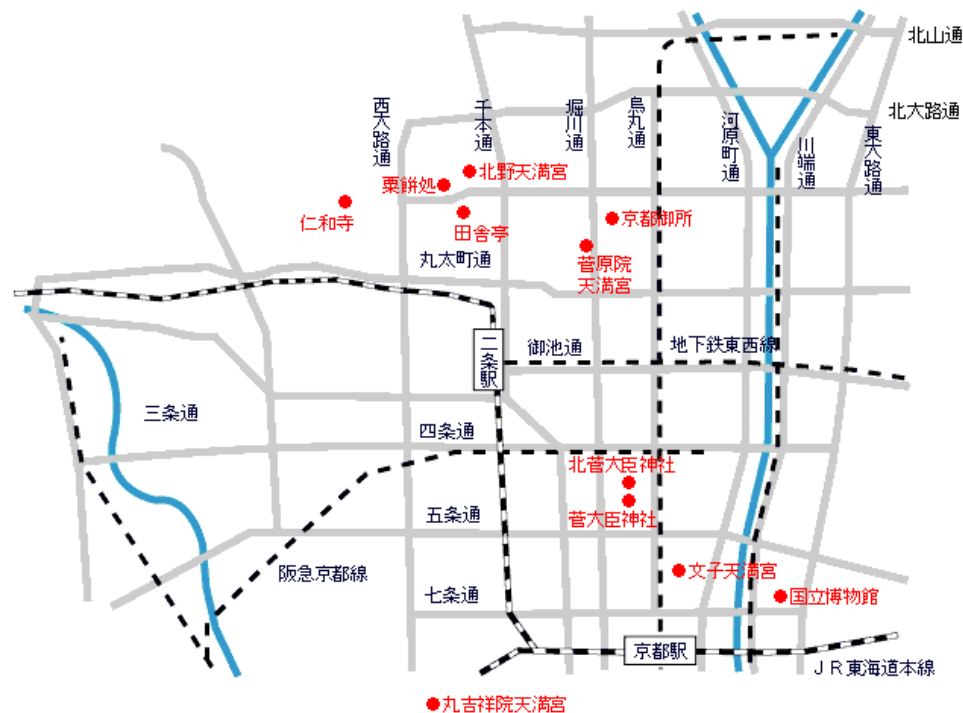
- ・夜半の寝覚（よわのねざめ）

いわゆる源氏巫流小説のひとつに数えられる王朝物語である。作者は菅原孝標女が有力視されている。

- ・浜松中納言物語（はままつちゅうなごんものがたり）

『源氏物語』に大きく影響されたと考えられる平安時代後期に成立した後期王朝物語の一つである。作者は菅原孝標女が有力視されている。

(4) 京の菅家邸宅址（菅原院天満宮内）



3. 主な出来事

年度	主な出来事
975 年頃	蜻蛉日記が完成。この作者は菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）の伯母・藤原道綱母（ふじわらみちつなのはは）
998 年頃	紫式部は親子ほど年の差がある山城守（やましろのかみ：京都府南東部の地方長官）「藤原宣孝」（ふじわらののぶたか）と結婚し、一女をもうける。
1001 年頃	紫式部、夫と死別し、その後『源氏物語』を書き始める
1007 年頃	紫式部、中宮・藤原彰子の女房として出仕
1008 年	『更級日記』の作者・菅原孝標女、誕生
1012 年頃	紫式部、このころまで中宮・彰子に奉仕する。奉仕している間に『源氏物語』を完成させたとされる
1017 年	父・菅原孝標、上総介に叙任され、上総に赴任。同行した孝標の次女・菅原孝標女はこのとき 10 歳

1020 年	9 月、13 歳の菅原孝標女、父・孝標が上総介の任期が満了したので、約 90 日かけて帰京する。 寛仁 4 年 9 月 3 日に門出し、同 12 月 2 日に京に入る
1024 年	菅原孝標女の姉、死去
1027 年	父・孝標、右大臣・藤原実資（ふじわらのさねすけ）の娘・藤原千古（ふじわらのちふる）の家司（いえのつかさ、家政をつかさどる職員）に任ぜられる
1032 年	父・孝標、常陸介に叙任される
1036 年	父・孝標、任期満了で常陸より帰京する
1040 年頃	孝標女、33 歳にて橘俊道と結婚
1041 年	夫・橘俊道、下野守に叙任される
1057 年	夫・橘俊道、信濃守に叙任される
1058 年	夫・橘俊道、死去。（享年 57）
1059 年	52 歳の孝標女、回想録・『更級日記』をまとめて執筆したとされる。この後の史料が無く、死没年齢は不明。

○あらすじ

父の菅原孝標の赴任先である千葉県で家族と一緒に暮らしていたが、父の任期満了に伴い京都へ戻るところから更級日記は始まる。京都から離れた上総国（現在の千葉県市原市）で生活していた作者は、噂に聞く源氏物語を読んでみたいと心から願っており、その夢が叶えられるかもしれないと心を躍らせながら京都へ向かう。

- ・ 私は小さい頃から光源氏（ひかるげんじ：源氏物語の主人公）が大好きで、物語の世界にあこがれていた
 - ・ 私が 13 歳の頃、父の転勤で上京することになった
 - ・ 途中で病気にかかってしまうこともあったが、私は京に着くと、親に物語をせがんだ
 - ・ 母は私にいろいろな物語を与えてくれたが、私は源氏物語が本当は読みたいたい心では思っていた
 - ・ ちょうどその頃、なついていた継母が父と離婚し、私を育ててくれた乳母は亡くなってしまった
- 散る花も また来む春は 身もやせむ やがて別れし 人ぞ悲しき

(散っていった花は また来年の春にみることができるだろう しかし一度別れてしまった人には もう会うことはできず 悲しく恋しいよ)

・ 私はしばらく塞ぎこんでいたが、14歳の頃、親戚が源氏物語全巻と伊勢物語をくださった

・ 私はあまりにうれしく、一気に飛び跳ねるように心が踊った。そして寺参りにも行かず読みふけた

・ 私も将来はきっと、夕顔や浮舟のように立派な女性になるだろうなど密かに妄想していたものである

・ ところが16歳の頃、火事で家がなくなり、大切にしていた猫も死んでしまった

・ さらにそのすぐ後、姉が子供を出産したあとに亡くなった

なぐさむる かたもなぎさの 浜干鳥 なにかうき世にあともとどめむ (母の乳母の歌)

(浜辺にいる千鳥が 自らの足跡を残すことができないように 私にはもう姉君を思い残すことはできません これ以上悲しき俗世に留まっていることはできないのです)

・ 私も悲しみに暮れたが、それでも物語への愛着は捨てきれず、仏様への信仰はおろそかにしていた

・ 26歳の頃には、僧侶に信仰心がないことを叱られたほどだった

・ 29歳の頃、母が出家したので、私が家の仕事を任されるようになった

・ 32歳の頃、私は宮仕えの仕事に就いたが、翌年には親の勧めでなんとも冴えない男性と結婚することになった

・ 結婚生活は窮屈だし退屈で、物語の世界とあまりにかけ離れていた

・ 38歳の頃、夫との間に男の子をもうけ、すでに私は今の現実と向き合うようになっていった

・ 夫が無事に出世し、子供が立派な人に育つように心から願ったのだ

・ 51歳の頃、夫が病にかかり、ついに亡くなった

・ 私がもっと、子供のころから信仰深ければこんな結果にはならなかったのだろうか

・ 今さら考えても遅いかもしれないが、これからはより一層、仏教に励むことにしよう

3-2. 更級日記の原文 (一部) と現代語訳

(1) 日記の目次

- ① [門出](#)
- ② [上総から下総へ](#)
- ③ [産後の乳母を見舞う](#)
- ④ [武蔵野竹芝寺の伝説](#)
- ⑤ [相模より駿河へ 足柄山の遊女](#)
- ⑥ [富士川のほとり 不思議な紙の話](#)

- ⑦ [遠江から三河へ](#)

- ⑧ [尾張から美濃・近江を経て京へ](#)

- ⑨ [物語へのあこがれ 継母との別れ](#)
- ⑩ [母の死 源氏物語に読みふける](#)
- ⑪ [わが家の庭 六角堂の遺水の夢](#)
- ⑫ [をかしげなる猫](#)
- ⑬ [長恨歌、姉の不吉な言葉、火事の事](#)
- ⑭ [姉の死](#)
- ⑮ [父の司召・東山の風情](#)
- ⑯ [東山より帰京](#)
- ⑰ [継母の名のりを責める・将来についてのはかない空想](#)
- ⑱ [父の常陸介拜命](#)
- ⑲ [太秦参詣・父の便り](#)
- ⑳ [初瀬籠り。鏡に映った未来](#)

㉑ [後の頼み](#)

(2) 更級日記

①門出（旅に出る前に、吉日を選んで、仮に家を出て近くに移ること）

・原文

（物語へのあこがれ）

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめける事にか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなる昼ま、宵みなどに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そらに、いかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師仏をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京にとく上げ給ひて、物語のおほく候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

(かどで)

年ごろあそびなれつるところを、あらはにこぼち散らして、たちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まにはまゐりつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕など引きたり。南ははるかに野のかた見やらる。ひむがし西は海ちかくて、いとおもしろし。ゆふぎり立ち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝(あさい)などもせず、かたがた見つゝ、ここをたちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、しもつきの国のいかたといふ所に泊まりぬ。庵(いお)なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていもねられず。野中に岡だちたる所に、たゞ木ぞ三つたてる。その日は雨にぬれたる物ども乾し、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮らしつ。

・語句

■あづま路の道のはてよりも… 「あづま路の道のはて」は常陸国。「あづま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」(古今六帖・五紀友則)「常陸帯」は鹿島神宮に供える帯。その帯に好きな相手の名を書いて備えると結ばれるという。「かご」は帯の留め金で「かごと」と掛ける。「かごと」はかりそめ。「常陸国にあるという常陸帯の留め金ではないが、ほんのかりそめでも、あなたに会いたいものだ」。

■なほ奥つ方 作者が少女時代を過ごした上総は常陸より西であり、「奥つ方」というのはおかしいが、虚構と現実が入り混じっているものか。

■あやし みすぼらしく鄙びていて教養

が無いこと。 ■あんなる 「あるなる」の音便。「なる」は推定伝聞の助動詞。 ■宵居 夕食後の団欒。 ■ゆかし ～したい。 ■人まに 人目の無い時に。 ■身を捨てて 身を投げ出して。 ■十三になる年 寛仁4年(1020年)菅原孝標は上総介の任期を終えた。 ■いまたち 地名。詳細不明。 ■あらはに 外から丸見えなほど ■こほちちらして 家具などをとりはずすこと。 ■すごく ひどく。程度がはなはだしいこと。 ■めぐり 境界。周囲の生垣など。 ■茅屋 茅葺屋根の、みすぼらしい建物。 ■蔀 格子の裏に板を張った戸。多くは上下二枚に分かれ、下一枚は固定しね上一枚は棒で吊り上げられるようになっている。これを半蔀という。 ■見やらる 自然に目に入ってくる。「る」は自発の助動詞。 ■かきくらし あたりを暗くして。「かき」は接頭語。 ■境 上総と下総の国境。 ■いかた どこか不明。 ■岡だちたる所 岡のような所。 ■立ち遅れたる人々 後始末のために上総に残っていた人々。

・現代語訳

京都から東国へ向かう道の最果てよりも、さらに奥の方で育った人(である私)は、(今思うと)どれほどまあ(田舎っぽくて)見苦しかっただろうに、どうして(そのようなことを)思い始めたのか、世の中に物語というものがあるそうだが、どうにかして見てみたいと思い続けて、手持ち無沙汰な昼間や、夜遅くまでおきているときなどに、姉や継母などのような人々が、その物語、あの物語、光源氏の様子などについて、あれこれ話すのを聞いていると、ますます読みたいという思いがつのるのだが、私が望むように、(姉や継母が物語を)何も見ないでどうして思い出して話してくれようか、いや、してくれない。とてもじれったいので、(自分と)等身大の薬師仏を作って、手を洗い清めるなどして、人目のないときにひそかに(その薬師仏をおいた部屋に)入っては、「(私を)京に早く上らせてくださって、物語が多くございまして聞くのを、この世にある限りお見せください。」とひれ伏して額をつけて、お祈り申し上げているうちに、十三歳になる年に、上京しようということで、九月三日に門出(の儀式)をして、いまたち(不明)という所へ移動する。ここ数年遊びなれた家を、丸見えになるほど乱雑に壊して、大騒ぎをし、日がちようど沈むときで、とても物寂しく霧が一面にたちこめているときに、車(牛車、ぎっしゃ)に乗るということで(家の方に)目を向けたところ、人目のないときに何度もお参りしては、額をつ

いてお祈りしていた薬師仏が（残されて）立っていらっしやるのを、お見捨て申し上げることが悲しくて、人知れず自然と泣けてくるのであった。

門出にあたって一時的に滞在した所（不明だが見渡す景色より高台）は、垣根などもなくて、茅葺（かやぶき）の仮小屋で、蔀戸（しとみど、板の両面に格子を組んだ戸。長押（なげし）から吊上げる）などもない。簾（すだれ）をかけ、幕などを引いた。南ははるかに野の末まで見渡せる。東と西は海が近くてたいそう趣深い。夕霧が立ちわたって、たいそう趣深いので、朝寝などもせず（早起きして）あちこち見ながら、ここを出発してしまうのもひどく名残惜しく悲しくてならなかったが、同じ月の十五日、雨があたりを暗くするほど降っている中、上総と下総の境を出て、下総の国のいかだ（不明）という所に泊まった。庵も雨水で浮かんでしまうほどに雨が降りなどするので、恐ろしくてちっとも寝られない。野中に、丘のようになっている所に、ただ木が三本立っている。その日は雨に濡れた多くの物を干して乾かして、上総に後処理のために残してきた人たちが遅れて追いつくのを待つのだということで、そこに一日過ごした。

[トップへ](#)

②上総から下総へ

・原文

十七日のつとめて、立つ。昔、つもつさの国に、まののてうといふ人住みけり。ひきぬのを千（ち）むら、萬（よろづ）むらおらせ、漂（さら）させけるが家のあととて、深き河を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、河の中に四つたてり。人々歌詠むを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬ この河柱のこらずは 昔のあとを いかで知らまし

その夜は、くろとの浜といふ所に泊まる。片つかたはひろ山なる所の、すなごはるばると白きに、松原茂りて、月いみじうあかきに、風のおともいみじう心細し。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ こよひならでは いつか見む くろとの浜の 秋の夜の月

・語句

ののてう 不明。「まの」という土地の「長（長者）」のことか？ ■疋布 二反つづきの布。二反＝一匹（疋）。 ■むら 反物を数える単位。 ■くろとの浜 千葉県木更津市小櫃（おびつ）川河口付近とすると道順が逆行している。または千葉市中央区能戸（のぶと）より稲毛区に至る一帯という説も。よくわからない。 ■ひろ山 こんな言葉は無い。「ひら山」の誤りか。または「ひろやか」か。

・現代語訳

十七日の早朝、出発する。昔、下総の国に、まのの長という人が住んでいたという。匹布（ひきぬの、布地で特に絹織物の二反（たん）を一疋として数える語）を千むら万むら練らせ、晒させた家の跡とあって、深い川を舟で渡。昔の玄関の柱がまだ残っているということで、大きな柱が、川の中に四つ立っている。それを見て人々が歌を詠むのを見て、私は、朽ちることもなくこの川柱が姿をとどめていなければ、昔の跡をどうやって知っただろう。その夜は、くろとの浜（不明）という所に泊まった。片方は広い山になっている所の、はるか向こうまで砂浜が白く広がっている。松原が茂って、月がたいそう明るく、風の音もひどく心細い。人々が風情を感じて歌を詠んだりしている中、私も、今夜は一睡もしないことにしましょう。だって今夜をおいて、いつ見るのです。くろとの浜の秋の夜の月を。

[トップへ](#)

③産後の乳母を見舞う

・原文

そのつとめて、そこを立ちて、下総（しもつき）の国と武蔵との境にてある太井川（ふといがわ）といふが上の瀬、松里の渡りの津にとまりて、夜一夜、舟にてかつがつ物など渡す。乳母（めのと）なる人はをとこなどもなくなして、境にて子生みたりしかば、はなれてべちに上る。いと恋しければ、行かまほしく思ふに、せうとなる人いだきて率て行きたり。皆人は、かりそめの仮屋などいへど、風すくまじく、ひきわたしなどしたるに、これはをとこなども添はねば、いと手はなちに、あらあらしげにて、苦といふものを一重うちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、紅の衣（きぬ）上に着て、うちなやみて臥し

たる月かげ、さようの人にはこよなくすぎて、いと白く清げにて、めづらしと思ひてかき撫でつつ、うち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど、いそぎ率て行かるる心地、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじ臥しぬ。つとめて舟に車かき据ゑて渡して、あなたの岸に車ひきたてて、送りに来つる人々これよりみなかへりぬ。上るはとまりなどして、行き別るるほど、行くもとまるも、みな泣きなどす。幼心地にもあはれに見ゆ。

・語句

■太井川 ふといがわ。現在の江戸川の下流。しかし下総と武蔵の境に流れるのは隅田川。作者の記憶違いか。 ■上の瀬 上流の浅瀬。 ■まつさと 今の松戸市。 ■津 船着き場。 ■かつがつ 「且つ且つ」。不満足ながら。どうやら。やっど。かろうじて。わずかに。とりあえず。急いで。 ■をともなどもなくして 夫までも亡くして。こんな僻地であることに加えて、さわに条件の悪いことにの意。 ■はなれてべちに上る 出産後の穢れを避けるために、作者たちとは別行動で上京する。 ■せうとなる人 兄。「せうと」は「せひと」の音便。 ■手はなち 手を抜いた。 ■苫 茅・萱などを編んだもの。 ■月影 月に照らし出された乳母の姿。 ■さやうの人にはこよなくすぎて 乳母なんていう身分の者には似つかわしくないほど上品に見えて。 ■珍し 乳母は作者を久しぶりに見るので珍しいのである。 ■あかず 満足がいかない。名残惜しい。 ■わりなし 理なし。どうしようもない。 ■おもかげにおぼえて 目の前にいないのにあるように姿が脳裏にあらわれて。 ■くんじ臥しぬ 「屈し」の音便。ふさぎこんで寝てしまった。 ■かき据ゑ かつぎ載せて。

・現代語訳

早朝、そこを出発して、下総の国と武蔵の境にある太井川（隅田川の記憶違い？）という川の上流の浅瀬に、松里（松戸市か？）の渡りの船着き場に泊まって、一晩中、船にてなんとか荷物を渡す。乳母である人は夫も亡くして、この国境で子を生んでいたのだから、出産の穢れを避けるということで、私たちとは別に上京するのだ。私はこの乳母のことがたいへん恋しかったので、訪ねていきたく思っていたところ、兄である人が私を馬に抱き乗せて、連れて行ってくれた。皆人は私たちの宿を仮の宿などと言うけれど、それでも風が吹くのを避けるために幕を引き渡しなどしているのに、一方乳母の泊まっている宿はというと、夫も連れ添っていないので、たいそう手抜きで雑な感じで、苫（とま、

萱(すげ)や茅(かや)などを粗く編んだむしろ) というものを一重ふいただけのもので、月の光がそこら中にさし入るので、乳母は紅の衣を上にはおって、つらそうに臥している姿が月の光に照らし出されたその様子は、乳母などという身分の人には無いほど上品に見えて、たいそう白く清らかで、乳母は私と久しぶりに会ったので珍しく思って私の頭をかき撫でつつ、泣くので、たいそう不憫に見捨てがたく思うけれど、急いで兄に連れられて出発していく心の内は、たいそう物足りなくてどうしようもない感じである。離れた後も乳母のことが脳裏に浮かんできて悲しいので、月を見ていても楽しい気分にはなれず、ふさぎ込んで寝てしまった。早朝、舟に車をつぎ載せて太井川を渡して、対岸で車を建てて、送りに来た人々は、これより皆帰った。京に上る者は留まって、行くものも留まる者も、行き別れることをみな泣いたのだった。子供心にもしみじみ悲しく見えた。

[トップへ](#)

④武蔵竹芝寺の伝説

・原文

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、泥(こひぢ)のやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻(あしおぎ)のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、中をわけゆくに、たけしばといふ寺あり。はるかに、ははさうなどいふ所の、らうの跡の礎(いしづえ)などあり。いかなる所ぞと問へば、「これはいにしへたけしばといふさかなり。国の人のあるけるを、火たき屋の火たく衛士(えじ)にさしたてまつりたりけるに、御前の庭を掃くとて、『などや苦しきめを見るらむ、わが国に七つ三つ作り据えたる酒壺に、さし渡したるひたえの瓢(ひさご)の、南風ふ吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ』と、ひとりごちつぶやきけるを、その時、みかどの御むすめ、いみじうかしづかれたまふ、ただひとり御簾のきはに立ち出でたまひて、柱によりかかりて御覧ずるに、このをのこの、かくひとりごつを、いとあはれに、いかなる瓢の、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾をおし上げて、『あのをのこ、こち寄せ』と仰せられければ、酒壺のことをいま一かへり申しければ、『われ率て行きて見せ

よ。さいふやうあり』と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、

負ひたてまつりて下るに、ろんなく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、この宮を据ゑたてまつりて、勢多の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひたてまつりて、七日七夜（なぬかななよ）といふに、武蔵の国に行き着きにけり。みかど、后、皇女失せたまひぬとおぼしまどひ、求めたまふに、『武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物をくびにひきかけて、飛ぶやうに逃げける』と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。いろんなくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、勢多の橋こほれてえ行きやらず。三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをのこを尋ぬるに、この皇女（みこ）、おほやけ使（づかい）を召して、『われさるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、率て行けといひしかば率て来たり。いみじくここありよりおぼゆ。このをのこ罪し、れうぜられば、われはいかであれと。これも前（さき）の世に、この国に跡をたるべき宿世（すくせ）こそありけめ。はやかへりておほやけに、このよしを奏せよ』と仰せられければ、いはむかたなくて、上りて、みかどに、『かくなむありつる』と奏しければ、『いふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮をとり返し都にかへしたてまつるべきにもあらず。たけしばのをのこに、生けらむ世のかぎり、武蔵の国を預けとらせて、おほやけごともなさせじ。ただ、宮にその国を預けたてまつらせたまふ』よしの宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて、住ませたてまつりける家を、宮など失せたまひにければ、寺になしたるを、たけしば寺といふなり。その宮の生みたまへる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それよりのち、火たき屋に女はあるなり」と語る。

・語句

武蔵国 東京と神奈川・埼玉の一部。 ■むらさき生ふ 紫草。武蔵野は紫草の産地として知られる。「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今・雑上・読人しらず）。伊勢物語第四十一段百人一首 49 番「みかきもり…」参照。 ■さしたてまつりたりけるに 国司が、その男を、衛士として朝廷に献上しところ ■ひたえの瓢 ひょうたんを縦に二つに割って、酒をすくう柄杓にしたもの。「ひたえ」は「直柄」で、手に握る柄の部分。ひょうたんの細くなった口の側を手に持つのである。 ■見で 「で」は打消。

■高欄 御殿の欄干。 ■つら ひとり。そば。 ■さいふようあり そのように言うのは、わけがあつてのことだ。軽い気持ちでは無いということか？
■かしこく 勿体なく。 ■さるべきにやあらけむ そうなるような前世からの因縁であつたのだろうか。 ■ろんなく もちろん。 ■瀬多の橋 近江国瀬田の唐橋。琵琶湖が瀬田川に注ぎ込む入り口あたりにある。東国と西国との境界ともいえる交通の要綱。 ■一間 橋脚と橋足との距離。 ■こほして橋板をはずして。 ■おぼしまどひ ご心配になり ■香ばしき物 薫物を焚き染めた姫君。 ■おほやけ 朝廷 ■さるべきにやあるらむ こうなるべくしてなつたのでしょうか。男に背負われて武蔵に下つたこと。

■れうず 掠ず。罪人を鞭打つこと。 ■跡をたる この国で男といっしょになつて子孫を残すことを言っている。 ■宿世 前世からの約束ごと。 ■おほやけごと 租税。労役など。 ■宣旨 天皇からの命令を記した公文書。上皇からの命令を記した公文書は院宣。天皇以外の皇族からの命令を記した公文書は令旨という。 ■やがて そのまま。

・現代語訳

今は**武蔵の国**（東京と神奈川・埼玉の一部）となつた。別段情緒のある所も見えない。浜も砂が白いわけでもなく、泥土のようで、紫草（ムラサキ）の産地として歌にも詠まれた武蔵野も、蘆や荻ばかりが高く生えていて、武士が馬に乗って弓を持つ

ムラサキ



その弓の先が見えないほどに、高く生え茂つていて、中を分けてゆくと、竹芝寺というのがあつた。はるかに、「ははそう」などという所の、建物の跡の礎が残つていた。どういう所かと聞くと、「これ昔、**竹芝**という土地でした。この国にある人がいたのを、火たき屋の火をたく衛士として国司が朝廷に献上しましたところ、御前の庭を掃き掃除しながら、「どうしてこんな苦しい目を

見るのかなあ。わが国には七つ三つ作り置いてある酒壺（さかつぼ、酒を入れてたくわえておく壺）に、瓢箪をたてに割った柄杓をさし渡して、その瓢箪が、南風が吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびく、あののんびりした様子を見ることもかなわないで、こうして宮中の警護に駆り出されているのだからなあ」と、独り言をつぶやいているのを、その時、帝の御むすめが、たいそう可愛がられていたものですが、ただ一人御簾（みす）の端に立出でなさって、柱によりかかって御覧になったところ、この男が、このように独り言を言っているのを、たいそう興味深く、どんな瓢が、どんなふうになびくのかしらと、たいそう心惹かれ、見てみたかと思われたので、御簾を押し上げて、「そこにいる男、こっちへ寄れ」とお召しになると、男はかしこまって縁側の欄干のそばに参ったところ、「さっき言ったことを今一度、われに言ってきかせよ」と仰せられたので、酒壺のことをもう一度申したところ、「われを連れて行って、その瓢を見せてくれ。こういうのは仔細あつてのことじゃ」と仰せられたので、勿体なく恐ろしいとは思ったけれど、前世からの因縁であろうかと男は姫宮を背負って武蔵国へ下っていくと、追っ手が来るのは当然なので、その夜、瀬田橋のたもとに、この姫宮を置き申し上げて、瀬田橋を柱と柱の間分くらい橋板をはずして、それを飛び越えて、姫宮を背負う。帝と后は、皇女がいなくなられたとご心配になり、お探しになったところ、「武蔵の国の衛士の男が、たいそうよい香りのする物を首にひきかけて、飛ぶように逃げていきました」と申し出があつたので、この男を捜したが、いない。さては故郷の武蔵国へ行ったのだらうと、朝廷より使が武蔵国へ下って、追いかけたところ、瀬田の橋の橋板が外されていて、渡ることができない。三か月かけて、使は武蔵国に行きついて、この男を尋ねていくと、この皇女、朝廷の使を召し出して、「私がこんなことになつたのも、めぐりあわせと思う。この男の家が見たくなって、連れていけと言つたので男は私を連れてきたのじゃ。たいそうここは、住み心地がよい場所に思える。この男を罪し、鞭打つなら、私はどうしたらいいのじゃ。これも前世からの、この国に子孫を残すべき因縁があつたのじゃ。早く都に帰って朝廷に、このよしを奏上せよ」と仰せられたので、どうすることもできなくて、ふたたび都へ上つて、帝に、「こうこうでした」と奏上したところ、「仕方ない。その男を罪しても、今はこの姫宮をとり返し都に戻すことはできないだらう。その竹芝の男に、生きていた限り、武蔵の国を預けとらせ、租税・労役も免除しよう。無条件に、姫宮にその国をお預けしよう」という宣旨が下つたので、男はこの家を内裏のように造って、姫宮を住ませ申し上げたのを、姫宮たちが亡くなって後、寺にしたのを竹芝寺というのだそうです。その姫宮がお生みになつた子供

たちは、そのまま武蔵という姓を得てあるということです。それより後、火たき屋には女を置くようになったということです」と語った。

[トップへ](#)

⑤相模より駿河へ 足柄山の遊女

・現代語訳

野山に蘆（あし）や荻の中をかき分かき分け武蔵と相模の中にあって、あすだ川という、在五中将在原業平が「いざこと問はむ」と詠んだという川である。（在五中将の家集（個人の歌集）にはすみだ川とある。）舟で渡れば、相模の国になった。西富（神奈川県藤沢市西富あたり）という所の山は、絵を見事に描いた屏風をたて並べたようだ。片方は海、浜の様子も、寄せては返す波の景色も、たいへん趣深い。

もろこしが原（大磯一带の海岸）という所も、浜の砂がたいへん白いのを二三日かけて通っていく。「夏は大和撫子が濃くうすく錦をひいたように咲いているのだ。今は秋の終わりだから見えないが…」と知っている、それでも所々に、こぼれ落ちたように残っていて、趣深くあちこちで咲いている。

大和撫子



「もろこしが原でやまと撫子が咲いているのも、面白いものですな」と人々はしみじみ面白がる。

足柄山という山は、四五日前からおそろしげに暗がりわたっていた。ようやく入り立つ麓のあたりさえ、空の景色は、はかばかしくない。言いようもなく鬱蒼と木々が生い茂っていて、たいへん恐ろしげだ。麓に宿を取ったところ、月も無い暗い夜で、闇に惑うような晩に、遊女が三人、どこからともなく出てきた。五十ばかりのが一人、二十歳ばかりと十四五のが一人ずつ。人々が庵の前

に唐笠をささせて、遊女たちをそこに招き入れた。男たちが火をともして見れば、昔、「こはた」（名の知れた遊女？）（とかいう者の孫だと言う。髪はたいそう長く、額髪が美しく両頬に垂れかかって、色白でこぎれいで、いやこれは相当なものだ。しかるべき家に下仕えなどしても通用しそうだなど、人々が趣深く思っているところ、声はまったく似るものなく見事で、空にすみのぼって見事に歌を歌う。人々はたいそうしみじみして、遊女たちに親しみをおぼえて近くに引き寄せ、人々がはやし立てて「西国の遊女はここまで見事なのはない」など言うのを聞いて遊女は「難波あたりの遊女に比べたら、私など物の数では無いですわ」と今様ふうに見事に歌うのだった。見かけもこぎれいで、声まで比類なく見事に歌うのに、そんな遊女が、このような恐ろしい山中に出発していくのを、人々は名残惜しく思ってみな泣くのを、私は幼心に、遊女たちと別れることも、この宿を出発することさえも、名残惜しく思った。まだ暗いうちから足柄山を越える。麓も鬱蒼としていたが、ましてこれから山中に入っていくのである。その恐ろしいことは大変なものだろう。登っていくにつれて、雲を足の下に踏むような心地だ。山の中腹に、木の下にわずかな空き地になっているところに、双葉葵がただ三筋だけ生えているのを「人里離れてこのような山中によくも生えているものよ」と、人々はしみじみ感じ入る。水はその山に三筋だけ流れている。

ふたばあおい



かろうじて足柄山を越えて、次の関所・横走の関のある山にその日は泊まった。ここからは、駿河だ。横走の関の傍らに、岩壺（不明）という所がある。言いようもなく大きな四角い石の穴の中から出てくる水が、どこまでも清らかで冷たかった。

⑥富士川のほとり 不思議な紙の話

・現代語訳

- **富士の山**はこの国にある。私が生まれた上総の国からは西の方角に見える山だ。その山の様子は、たいそう世に見えない並々ならぬ様子だ。世間並でない山の姿の、紺青の色を塗ったようであるところに、雪が消える間もなくつもっているのも、色の濃い衣に、白い裃を着ているように見えて、山の頂が少し平になっている所から、煙が立ち上っている。夕暮は火が燃え建つのも見える。**清見が関**（静岡県清水市興津清見寺あたりにあった関所）は、片方は海であるところに、関所の番小屋などが多くあって、海まで杭を打って柵をわたしてある。富士の煙と潮煙が互いによびあっているのであろうか、清見が関の波も高くなるものと思われる。趣深いことこの上無い。**田子の浦**（蒲原と由井あたりの駿河湾に面したところと言われる。現在の富士宮市に同じ「田子の浦」という地名があるが、違う場所と考えられる）は波が高いので舟で漕ぎめぐる。**大井川**という渡し場がある。水が世間の並の様子とは違い、米を細かく砕いた粉を濃く流したようで、白波立つ水は勢いよく流れていた。富士川というのは、富士の山から流れている水である。その国の人が出てきて語ることには、「一年ばかり前、よそに出かけたところ、たいへん暑かったので、この川のほとりに休みつつ見ていますと、川上の方から黄色い物が流れてきて、物にひっかかって留まっているのを見れば、書き損じの紙でした。取り上げて見れば、黄色い紙に、朱筆で濃くはっきりと書かれていました。不思議に思っで見れば、来年国司がかわる予定の国々を、除目のようにすべて書いてあり、ここ駿河の国も来年国司が変わるということで、新しい国司の名が書いてあり、その横に添えてもう一人の名が書いてありました。私は不思議に思い、意外なことにあきれて、この紙をとり上げて、干して、しまっておきましたところ、次の年の司召に、この紙に書かれたことと一つも違わず、この国の守に紙に書かれていたまさにその人が就任したのですが、三月のうちにその人は亡くなって、またなりかわった新しい国司も、この紙の傍らに書いてあった人だったのです。このようなことがあったのです。来年の司召などは、今年この富士の山に、たくさんの神々が集まって、決めていらっしゃるのだと存じ上げます。珍しいことでございます」と語った。

[トップへ](#)

⑦遠江から三河へ

- ・現代語訳

沼尻（不明）という所も無事に過ぎて、たいそう病が発生して、遠江（静岡県西部）にかかる。さやの中山（駿河と遠江の境の難所）などを越えたのも気づかなかった。たいそう苦しかったので、天中川（天竜川）という川のほとりに、仮小屋を造って設けたところ、そこで何日か過ごしているうちに、ようやく病が治ってきた。冬が深くなったので、川風が激しく吹き上げつつ、寒さも堪えがたく感じられた。天竜川を渡って浜名の橋（浜名湖から外海に流れる浜名川にかかっていた橋）に着いた。浜名の橋は父が任国へ下向した時は樹皮のついたままの丸木をかけて渡ったのだが、今回は、その橋の跡さえ見えないので舟に乗って渡る。入江に渡してある橋である。外海は、たいそう荒く波は高く、入江の殺風景なあちあちの洲に、ただ松原だけが茂っている中から、浪が寄せては返すのも、さまざまな色の玉のように見えて、本当に末の松山の歌にあるように波が松の木を超えてしまうように見えて、たいそう趣深い。それより上手は、猪鼻という坂（不明）で、えも言われぬ侘しい坂を上れば、美川の国の高師の浜（豊橋市の東南。愛知県渥美郡高師村を中心とした地域）というところだ。八橋は名が残るだけで、橋の跡もなく、何の見どころもない。二むらの山の中に泊まっている夜、大きな柿の木の下に庵を作ったところ、一晩中、庵の上に柿の落ちかかるのを、人々が拾ったりしている。宮路の山（宝飯

（ほい）郡音羽町と御津町の境）といふ所を超える時は、十月の末であるの

に、まだ紅葉は散らず盛りであった。嵐はここには吹いてはこないのだなあ。宮路山ではまだ紅葉が散らないで残っているのだから。三河と尾張の国境であるしかすがの渡し（志香須賀の渡し）は、なるほど古歌にあるように、行くべきか、行かざるべきか思いわずらわれそうで、面白い。

しかすがの渡し



[トップへ](#)

⑧尾張から美濃・近江を経て京へ

・現代語訳

尾張の国、鳴海（名古屋市緑区鳴海町付近）の浦を過ぎていったところ、夕汐がどんどん満ちてきて、今晚泊まるにも、むこうの宿場まで越えてから泊まるにも引き返して泊まるにもどっちつかずの位置に来てしまった。汐が満ちてくれば、ここを通り過ぎることもできなくなると、せいいっぱい走って必死に通り返した。

美濃の国（岐阜県の南部）との境に、墨俣（岐阜県安八（あんぱち）群墨俣町）という渡を渡って、野上（岐阜県不破郡垂井と関ヶ原の間。遊女が多いことで知られていた）という所に着いた。そこに遊女たちが出てきて、一晩中歌うにつけても、足柄山で出会った遊女たちのことが思い出されて、しみじみとなつかしく、どこまでも恋しく思われた。

雪が降りあれまどうなので、なんの情緒もないので、不破の関、あつみの山など越えて、近江の国で息長（おきなが）といふ人の家に泊まって、四五日過ごした。みつさかの山（不明）のふもとに、夜も昼も時雨やあられが降りみだれて、日の光もちっともささないで、大変うつとうしい。そこを出発して、犬上・神崎・野洲・栗太などいふ所々、なんとなく通り過ぎた。琵琶湖の水面を

はるかに見渡して、なで島（不明）、竹生島（琵琶湖北部に浮かぶ島）などい

う所が見えるのは、たいへん趣深い。勢多の橋（琵琶湖が瀬田川に流れ込む河口にかかる橋。古くから交通の要衝で、「勢多橋を制するものは天下を制す」と言われた。壬申の乱や藤原仲麻呂の乱の舞台ともなった）。はみな崩れてい

て、渡るのが大変だった。粟津（大津市東南の湖岸から瀬田にかけての地域）

にとどまって、師走の二日、京に入る。暗くなってから行き着こうと、申の時

（午後四時）ごろ出発して行くと、逢坂の関（近江と山城の境）の近くになっ

て、山腹に仮づくりの「きりかけ」という囲いをしたものの上から、丈六の仏のいまだ粗造りでいらっしゃるのが、顔だけ出ているのが見やられた。人里はなれてこんな場所にありながら、場所のことなど少しも頓着なさっていないご様子なのが、いかにもありがたい仏さまだなあと、遠くにながめて過ぎた。多くの国々を通り過ぎてきたが、駿河の清見が関と、逢坂の関だけは、他に比べ

ようもなく素晴らしい。たいそう暗くなってから三条の宮（一条天皇第一皇女修子（しゅうし）内親王。母は定皇后）の西にあるわが家に到着した。

[トップへ](#)

⑨ 物語へのあこがれ 継母との別れ

・現代語訳

わが家は広々として荒れた所で、過ぎてきた山々にも劣らず、たいそう恐ろしげな深山木がうっそうとしげっているようで、都のうちとも思えない所の様子だ。まだ落ち着かず、たいそう取り込んでいる中ではあるが、ずっと物語を読みたいと思いつけてきたことなので、「物語を求めて見せて。物語を求めて見せて」と、母にせがむと、三条の宮（一条天皇第一皇女修子内親王）さまのところに、親族が衛門の命婦という女房名で出仕しているので、その人を尋ねていき、手紙を送るとその人は私たちが帰ってきたのを珍しがり喜んで、三条の宮さまからいただいたものだといって、特別に立派な草紙を何冊か、硯の箱の蓋に入れてよこしてくれた。嬉しく大感激で、夜も昼もこれを見るのから始まって、もっともっと他の物語が読みたいと思ったが、上京早々の都の片隅で、誰が物語を求めて見せてくれる人があるだろうか。継母であった人は宮仕えしていたが、父が上総へ下ったので、思い通りにならないことがいくつもあって、夫婦仲が悪くなって、父と別れるのだと五つばかりになる子供など連れて、「あなたが優しくしてくださった心のほどは、けっして忘れません」など言って、梅の木の軒端に近くて、たいそう大きいのを、「この花が咲く頃には訪ねてきます」と言い置いて出ていったのを、心のうちに恋しく懐かしく、会いたいと思いつつ、忍び音に泣いてばかりいて、その年も暮れた。早く梅よ咲いておくれ。梅が咲いたら来てくれると継母が言っていたのを、本当に来てくれるだろうか、その梅を見ながら待ち続けていたところ、花もみな咲いてしまったが、音沙汰もない。思いあぐねて花を折って歌を書き送った。

[トップへ](#)

⑩ 母の死 源氏物語に読みふける

・原文

その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあはれに見し乳母（めのと）も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。いみじく泣きくらして見いだしたれば、夕日のいとはなやかにさしたるに、桜の花のこりなく散りみだる。

散る花もまた来む春は見もやせむやがて別れし人ぞこひしき

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ亡くなりたまひぬなり。殿の中将のおぼし嘆くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞く。

上（のぼ）り着きたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりしを、「さよふけてねざめざりせば」など書いて、「鳥辺山たにに煙のもえ立たばはかなく見えしわれと知らなむ」と、いひ知らずをかしげに、めでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまさる。かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのずからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをしく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生（お）ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしきぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず。

習はむとも思ひかけず。物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりな

む。光の元治の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはなくあさまし。

・語句

・ ■治安元年（1021年）春から秋にかけての疫病の流行をさす。 ■松里の渡り 千葉県松戸市。2「産後の乳母を見舞う」に登場。 ■月かげ 月の光に照らされた乳母の姿。 ■やがて そのまま。 ■侍従の大納言 藤原行成（972-1028）権大納言に至るが、侍従でいた期間が長いので侍従の大納言とよばれる。その娘は道長の息子長家と結婚した。 ■御むすめ 行成の娘は治安元年三月十九日に没した。『栄花物語』にその死を人々が嘆いた様子が描かれている。 ■殿の中將 「殿」は大殿藤原道長。その末子長家が行成の娘と結婚した。当時17歳。右近衛中將従三位。 ■さよふけて 「小夜ふけてねざめざりせば時鳥（ほととぎす）人づてにこそ聞くべかりけれ」（『拾遺集』夏・壬生忠見）詞書に「天曆の御時の歌合に」。 ■鳥辺山… 『拾遺集』哀傷。鳥辺山は京都市東山区。昔の火葬場の跡がこのあたり一帯にあった。 ■思ひくんず 屈す→くんず。思い悩んで、ふさぎこむこと。 ■紫のゆかり 『源氏物語』のうち紫の上に関係するところ。あるいは「若紫巻」。 ■人かたらひ 人に相談すること。 ■太秦 京都市右京区太秦の広隆寺。帰化人系の氏族である秦氏の氏寺で平安京遷都以前からあった平安京最古の寺院。 ■ことごとなく 異事なく ■出むまに 寺を出るとすぐ。 ■をばなる人 不明。菅原孝標女の伯母といえは右大將道綱母が有名だが、すでに995年に亡くなっている。 ■生ひなり 成人すること。 ■まめまめしき物 実用向きのもの。 ■まさなし よくない。ふさわしくない。 ■ゆかしくしたまふなる物 読みたいとおっしゃっているという物。「ゆかし」は～したい。 ■在中將 在原業平を主人公とする『伊勢物語』のこと。 ■とほぎみ 以下、せり河、しらら、あさうづは物語の題名だが実在せず、内容は不明。 ■はしる はしる 飛び飛びに。 ■几帳 T字型の木組みに絹などをかけてついたてにしたもの。 ■おのづからなどは 意味不明。自然にという意味か。 ■そらに 暗誦して言葉が自然に浮かんでくること。 ■法華經五の卷 『法華經』五の卷には女人成仏が書かれている。 ■夕顔 『源氏物語』夕顔巻に登場。恋人頭中將に愛された後、源氏の君のもとに召されるが、六条御息所の生霊に取り殺された。 ■宇治の大將 『源氏物語』宇治十帖の主人公薫。源氏の君の妻・女三の宮と柏木との間にできた不倫の子。 ■浮舟 『源氏物語』宇治十帖のヒロイン。八の宮と侍従中納言の間にうまれ常陸で成長した。後、薫の

恋人となるが、匂宮との三角関係に悩んだあげく宇治川に身を投げるが助けられて出家する。

・現代語訳

その春、世の中は疫病の流行でたいへんなことである中に、上総の松里の渡（千葉県松戸市）で月の光に美しく照らされていたのを見た、あの乳母も、三月一日に亡くなった。どうしようもなく思い嘆いて、物語を読みたいとも思わなくなった。たいそう泣いてばかりいて、外を眺めていると、夕日がたいそう華やかに差しているところに、桜の花がもう枝には残ったものではなく、散り乱れている。散る花も、また来年の春は美しい姿を見せてくれるというのに、あのまま別れた乳母とは二度と会うことができない。ひどく恋しい。また聞けば、侍従の大納言藤原行成さまの姫君もお亡くなりになったそう。姫とご結婚なさっていた中将殿のお嘆きになる様子は、私自身悲しい折でもあり、たいそうしみじみと共感して、耳にした。上京した当時、「これを手本にしなさい」といって、この姫君の手蹟をくださったのだが、「きよふけてねざめざりせば」と拾遺集の歌など書いて、「鳥辺山の谷に煙が燃えたっていると、私は死んでしまうのではないかと思う」と、なんとも趣深く、美しい字でお書きになったのを見て、たいそう涙があふれて止まらなかった。このように思い悩みふさぎこんでばかりいると、私の心を慰めようとして、心配して、母が物語など求めて見せてくださったところ、まったく母の思惑通りだ。自然と慰められていった。『源氏物語』の紫の上に関係した部分を見て、続きを見たく思うけれど、人に相談もできない。誰れもいまだに都馴染していない頃だから、物語など見つけてくれようもない。たいそうもどかしく、読みたいと思うままに、「この源氏の物語、一の巻から全部見せてください」と心の内に祈る。親が太秦の広隆寺に参籠なさった時も、外でもないこのことを申し上げて、寺を出るとすぐに『源氏物語』を最後まで見たいと思うが見ることはできない。たいそう残念に思って嘆いていたところ、叔母である人が田舎から上京して住んでいる所を訪ねていったところ、「たいそう可愛らしく、ご成人なさりましたな」など、しみじみ感心し、珍しがって、帰り際に、「何をさしあげましょうか。实用向きのものは、つまらないです。読みたがっていらっしゃるといものを、差し上げましょう」といって、源氏の物語五十余巻、木箱に入れたまま、『伊勢物語』『とほぎみ』『せり河』『しらら』『あさうづ』などという物語もいっしょに一つの袋に入れてもらって帰る心地のうれしさといったら、最高だった。飛ばし飛ばし、ちらちらと見ては、今まで思い通りに読むことができず、もどかしく思っていた源氏の物語を、一の巻からはじめて、人に邪魔もさ

れず、几帳のうちに臥して引き出しつつ見る心地は、後の位もこれに比べたら、何だろうか。

[トップへ](#)

⑪ わが家の庭 六角堂の遣水の夢

・現代語訳

五月のはじめごろ、軒端近い花の立花が、たいそう白く散っているのを眺めて、時節にあわず降る雪かを見るところだった。花橘の香りがなければ。足柄という山の麓に、暗がり渡っていた木のように、わが家の庭は木がうっそうと茂っているところなので、十月ごろの紅葉は、四方の山辺よりも一段とたいそう趣深く、錦をひきわたしたようであるのに、外から訪ねてきたお客さんが「今、まいった道に、紅葉がたいそう趣深く咲いている所がありました」というのに、ふと、どこにも負けないのに私の宿の秋の暮れの景色ばかりは。いつまで見ても飽きないのに。物語のことを、昼は一日中思い続け、夜も目の覚めている限りは、こればかり心にかけていた所、夢に見ることに、「このごろ、皇太后宮さまの御子の一品の宮の御用として、六角堂に遣水（やりみず、外から引き入れて庭園につくった流れ）を作りました」という人があるのを「それはどういうこと」と尋ねると、「アマテラスオオミカミをご信仰なさい」という。そんな夢を見ながら、人には語らず、何とも思わないで終わってしまった。たいそう、どうしようもない。春が来るたびに、この一品の宮の庭を眺めつつ、春が来る前はいつ桜が咲くかしらと待ちわびるし、桜が散ってしまっただけだと嘆く春の間は、私はまるで自分の家のように宮さまのお屋敷の桜をながめているものだなあ。

[トップへ](#)

⑫ をかしげなる猫

・現代語訳

三月の末頃、土忌みに人の家に移ったところ、桜のさかりで趣深く、今まで散らないものもある。わが家に帰ってきて次の日、馴れ住んだわが家の桜を春が暮れて散る頃に、一目見たことだなあ。

花の咲き散る時節ごとに、乳母が亡くなった時期だと心がふさぐことであるのに、同じ時期に亡くなられた侍従の大納言の姫君の手習いの跡を観つつ、なんとなく心が沈んでいたところ、五月ごろ、夜ふけまで物語を読んで起きていたところ、どこから来たかもわからないのに、猫がたいそうノンビリと鳴いたのを、はっと気づいて見れば、たいそうかわいい猫がそこにいた。どこから来た猫だろうと見ると、姉である人、「静かにして。人に聞かせてはだめ。たいそうかわいらしい猫だこと。飼いましょう」と言うので、かたわらに猫を寝かせた。尋ねてくる人があるだろうと、これを隠して飼っていたところ、まったく召使などのもとには立ち寄らず、じっと私たち姉妹の前にばかり座っていて、食べ物も汚いのはよそに顔をそむけて食べない。私たち姉妹の中にぴったりまとわりついて、可愛がり愛でているうちに、姉が病気にかかったことがあって、家の中が看病でなんとなくざわついているので、この猫を北面に追いやって呼ばないでいると、うるさく鳴きさわぐけれど、猫には猫なりの事情があるのだろうとと思っていたところ、病気の姉が起きだして、「どこ、猫は。こっちに連れてきて」というので、「なぜ」と尋ねると、「夢にこの猫が私のそばに来て、「私は侍従の大納言の姫君が、こうなったものです。しかるべき前世からの縁があって、あなたの妹さんがしきりに私のことをあわれに思い出してくださるので、ほんのしばらくここに住んでいたのを、このごろは召使部屋に追いやられて、たいそう侘しいことです」といって、ひどく泣く様子は、高貴に美しい人と見えて、はっと目をさましたところ、この猫の声であったのが、たいそうあはれなことです」とおっしゃるのを聞くに、たいそうあはれなことである。その後はこの猫を北面にも出さず、大切にお世話した。私がただ一人いる所にこの猫が向かい合っていると、かきなでつつ、「侍従の大納言の姫君でおはしますね。大納言殿にお知らせしないといけませんね」と言葉をかけると、私の顔をじっと見つめながら、なごやかに鳴くのも、気のせいか、ちょっと見たところ、並大抵の猫ではない感じで、私の話を聞き知っているような顔に見えて、しみじみ愛しいことだ。

[トップへ](#)

⑬長恨歌、姉の不吉な言葉、火事の事

・現代語訳

世の中に長恨歌という漢詩を物語に書いて持っているところがあると聞いて、たいそう読みたく思うけれど、頼むこともできなかったのだが、しかるべきつ

てを尋ねて、七月七日歌を書き送ってお願いした。玄宗皇帝と楊貴妃が契ったという昔の今日の日がどんなだか知りたいばかりに、彦星のわたる川波のように、思い切ってあなたに、貸してほしい旨を打ち明けるのです。

返し、

牽牛と織女がその兩岸に立って逢うという天の川の川辺には私も心惹かれております。普段は不吉な書物なので人には貸さないのですが、今日はそんなことも忘れて、お貸しいたしましょう。

同じ年の十三日の夜、月がたいそう隈なく明るい晩に、みな人も寝てしまった夜中ごろ、縁側に出て、姉である人が、空をつくづく眺めて、「たった今私が理由もなく飛び失せてしまったら、あなたはどう思う」と尋ねるのに、なんとなく恐ろしく思っている私の様子を見て、姉は、別の話題にとりつくろって、笑いなどして聞いていると、かたわらの家の前に先払いをしながら進んできた牛車がとまって、「萩の葉、萩の葉」と呼ばせるが、答えないようだ。牛車の主は呼びあぐねて、笛をたいそう優雅に吹きすまして、過ぎていったのだった。笛の音が、まさしく雅楽の秋風楽と聞こえていたのに、どうして萩の葉はそよとも答えなかったのでしょうか。といったところ、姉はいかにもといて、萩の葉が答えるまで笛を吹き続けなくてそのまま通り過ぎてしまった笛の音の惜しいこと。このように夜が明けるまでぼんやり物思いに沈んで秋の夜空をながめ、夜が明けてからみな人は寝た。その翌年、四月の夜中ごろ火事があって、大納言殿の姫君と思ってかわいがっていた猫も焼けてしまった。「大納言殿の姫君」と呼ぶと、その言葉を聞き知っているような顔で歩み来たりしていたので、父である人も「不思議にあわれなことだ。大納言殿のご報告しよう」など言っていたところだったので、たいそうしみじみ悲しく、惜しいことに思われた。かつての住まいは広々として、人里離れた山のようにあつたが、桜や紅葉の折には四方の山辺も問題にならないほど素晴らしかった。それを見慣れていたので、新しい住まいのたとえようも無くせまい所の、庭というほどの広さもなく、木などもないので、たいそう憂鬱で、向いにある家には、白梅・紅梅が咲き乱れて、風がふくと自然と梅の香が香ってくるのにつけても、住み慣れたかつての住まいが限りなく思い出されるのだった。

[トップへ](#)

⑭姉の死

・現代語訳

その五月の朔日に、姉である人が子を産んでから亡くなった。よその人のことでさえ、幼い頃から人の死というものは大変悲しいことと思い続けてきた私なのに、まして血を分けた姉の死だ。言いようもなく悲しく思い嘆いた。母たちは皆姉の遺体を安置してある部屋にいたので、姉が遺した幼い子供たちを私は左右に寝かせていたところ、荒れ果てた屋根の隙間から月の光が漏れ差ってきて、子供の顔に当たるのが、たいそう不吉に思えたので、袖を覆って、もう一人をもかき寄せて、深く思いに沈むのだった。姉の法要の時期が過ぎて、親族から、「亡くなった貴女の姉君が、必ず手に入れて送ってくださいと言っていたものを、姉君の生前は結局手に入れることができなかったものを、今になって人が送ってきたのが、哀れに悲しいことです」といって、「かばねたづぬる宮」という物語を送ってきた。私は歌を返した。

うづもれぬ かばねを何に たづねけむ 苔の下には 身こそなりけれ

(埋もれることもなく残っていた「かばねたづぬる宮」などという不吉な物語を、どうして姉は探していたのでしょうか。探していたその姉こそ、苔の下に埋もれて、死んでしまったのに)

姉の乳母である人が、「今はここにとどまるべき理由もありません」などと言って泣く泣く実家に帰っていくのに、「あなたはこうして、実家に帰っていく。哀しい。なんとという悲しい別れなのでしょう。亡き姉をしのぶ形見に、どうかとどまってほしいと思います」など書いて、「硯の水も凍ってしまったので、文字も私の心も閉じられて、何も書くことができません」と書き送った返事に、

なぐさむる かたもなぎさの 浜千鳥 なにかうき世にあともとどめむ

(干潟の浜千鳥が足跡を残すすべが無いように、私はここに残っていても、姉君を思い出すすべも無いのです。どうして留まっておれましょうか)

この乳母は姉の墓所を見て、泣く泣く帰っていった。それについて私が詠んだ。

昇りけむ 野辺は煙も なかりけむ いづこをはかと たづねてか見し

(亡き人が煙となって立ち上っていった野辺にはもう何の目印も残っていないのに、どうして墓の場所を訪ねて行って、その墓を見ることができたのだろうか。)

これを聞いて継母であった人が、

「そこが墓だよと確かな見当も無かったでしょうけど、先立つ涙こそ道しるべだったのでしょう」

『かばねぬづぬる宮』という物語を贈ってくれた方が、

住みなれぬ 野辺の笹原 あとはかも なくなっていくに たづねわびけむ
(人も住み慣れない野辺の笹原は目印とて無く、泣く泣く乳母は墓を訪ねていったのでしよう)

これを見て私の兄が、姉の葬送をした夜のことを思い出して、

見しままに もえし煙はつきにしを いかがたづねし 野辺の笹原
(見ているうちにすぐに火葬の煙は燃え尽きてしまったのに。乳母はどうやって野辺の笹原を訪ねていったのだろうか)

何日も雪が降り続けるころ、吉野山にすむ尼のことが思いやられた。

雪降りて まれの人めも たえぬらむ 吉野の山の 峰のかけみち
(雪が降ると、まれの人を訪れも絶えてしまうだろう。吉野山の峰の険しい道では)

[トップへ](#)

⑮父の司召・東山の風情

翌年の正月の司召(つかさめし、官吏を任命すること)に、親の任官がようやくかなって喜ぶべきところ、任官にもれて期待がはずれた早朝、同じく任官に

もれて空しい思いをしているだろう人のもとから、「いくらなんでも今回は任官できるだろうと思いつつ、夜が明けるのを待っている心もとなさ」といつて、

明くる待つ 鐘の声にも 夢さめて 秋のもも夜の 心地せしかな
(夜明けを待っていると聞こえてくる鐘の音に目がさめて、秋の夜長を百夜も重ねたような待ち遠しい気持ちです)

と言ってきた返事に、

b 暁を なにに待ちけむ 思ふこと なるともきかぬ 鐘の音ゆゑ

(私たちはどうして夜明けを待っていたのでしょうか。たとえ任官がかなったとしてもそれが鐘の音によってわかるわけではないのに。)

四月の末ごろ、しかるべき理由があつて、東山という所へ引っ越した。道すがら、田んぼの苗代に水を引き入れているのも、もう田植えがすんでしまっているのも、なんとなく青みがかっていて趣深く、見渡せる。

山の影が暗く、家の前に近く見えて、心ぼそくしみじみする夕暮れ、水鶏がたいそう鳴く。

b たたくとも たれかくひなの 暮れぬるに 山路を深く たづねてはこむ

(戸を叩くような音がするが、こんな山路深く、誰が訪ねてくるものか。あれは水鶏の声だ。)

霊山に近い所なので、詣でて参拝した所、たいそう苦しいので、山寺にある湧き水に身を寄せて、手で水をすくいあげて飲んだところ、「この水の飲み飽きることなく美味ですからね」という人のあるのに対して、

b 奥山の 石間 (いしま) の水を むすびあげて あかぬものとは 今のみや知る

(奥山の石の間の水をすくい上げて飲んで、飲み飽きないものだと、今更知ったのですか。古い歌にも詠まれていますよ。)

と言ったら、水を飲んでいた人が、

b 山の井の しづくににごる 水よりも こはなほあかぬ 心地こそすれ

(古い歌にある山の湧き水の、すくい上げた雫に濁る水よりも、この水はいっそう飲み飽きない心地がしますよ。)

家に帰って、夕日があざやかに差しているので、都の方角も残りなく見渡せるような中、この「しづくににごる」と詠んだ人は、京に帰るといって、私と別れるのを心苦しげに思って、次の日の早朝、昨日あなたと別れての帰り道、山の端に夕日がすっかり沈んでしまい、それを見るにつけても東山のあなたのことが心細く思われたことですよ。念仏する僧が暁に勤行する音が尊げに聞こえてきたので、戸を押しあけると、ほのぼのと明けゆく山際、薄暗い木々の梢にあたり一带霧がかかり、花紅葉の盛りよりも、何となくこんもりと木々の梢が区切った空の景色は、ぼんやりと曇っていて趣深いのに、ほととぎすさへ、すぐそばの梢に何度も何度も鳴くのだ。

b たれに見せ たれに聞かせむ山里の このあかつきも をちかへる音も

(誰に見せ、誰に聞かせよう。山里のこの暁も、ほととぎすが繰り返し鳴きしきる声も。)

この月末の日、谷の方角にある木の上に、ほととぎすが騒々しく鳴いていた。

b 都には 待つらむものを ほととぎす けふ日ねもすに 鳴き暮らすかな

(都の人々はほととぎすの声を聞くのを心待ちにしているでしょうに、ここ東山では、今日は一日中鳴き続けているなあ。)

などと、ぼんやり辺りの景色を眺めてばかりいると、一緒にいる女房が、「今この時、興にもほととぎすの声を聞いている人があるでしょうか。こうして私

たちがわびしく物思いにふけっていると、思いやってくれる人はあるでしょうか」など言って、

b 山ふかく たれか思ひは おこすべき 月見る人は 多からめども

(山深くにいる私たちのことを、誰が思いおこしてくれるでしょう。月見る人は多いといっても。)

たとえば、

b 深き夜に 月見るをりは 知らねども まづ山里ぞ 思ひやらるる

(深き夜に、月を見る折には、山の生活は知らないといっても、まず山里に思いを馳せるものですよ。きっと都の人たちの中にも、私たちのことを思ってくれる人はいます。)

もう暁だろうと思う時分に、山の方から人が大勢来るような音がする。目をさまして見やると、鹿が縁先まで来て、鳴くのだ。鹿の声というものは、近くに聞くのは情緒がないものだ。

b 秋の夜の つま恋ひかぬる 鹿の音は 遠山にこそ 聞くべかりけれ

(秋の夜に牡鹿が牝鹿を恋しく思って切なげに鳴く、その鹿の声は遠くの山にこそ聞くべきものだなあ。)

知人が近いあたりまで来て帰ったと聞くのに、

b まだ人め 知らぬ山辺の松風も 音して帰る ものところ聞け

(はじめて吹き付ける山辺の松風も音だけは残して帰ります。まして見知っているあなたと私の仲。顔くらい出してくれてもよいのに。)

⑩東山より帰京

八月になって、二十日過ぎの暁がたの月が、たいそう情緒深く、山の方は薄暗く、滝の音も他に似たものが無いほど情緒深い中、あたりの景色をぼんやり眺めていて、風情を解する人に見せたいなあ。山里の秋の夜深い、この有明の月を東山を登って京に戻る道すがら、東山に来た時は水ばかりと見えた田も、みな刈り入れが終わっている。苗代に一面、水を張っていた田。それが今やすっかり刈り入れが終わっている。私たちはずいぶん長く東山にいたのだなあ。十月末ごろ、ちょっと東山に来てみると、薄暗く茂っていた木の葉が残りなく散り乱れており、たいそう趣深くあたり一面見渡せて、心地よくさらさらと流れていた水も、木の葉にうずもれて、流れの跡だけが見えている。私たちが引越してから、水すらも住み果てたのだ。木の葉散る嵐の山の心細さに。東山にすむ尼に、「春まで命があれば、必ずまた来ます。花ざかりにはまず教えてください」など言って帰ったのを、年明けて三月十日過ぎになるまで連絡が無いので、

b 契りおきし 花のさかりを つげぬかな 春やまだ来ぬ 花やにほわぬ

(約束していた花の盛りをお知らせくださいませんね。春はまだ来ないのでしょうか。花は色づかないのでしょうか)

よその家に移ってきて、月のころ、竹のもとに近く、風の音に目ばかりさめて、落ち着いて寝られない時、

b 竹の葉の そよぐよごとに 寝ざめして なにともなきに ものぞ悲しき

(竹の葉がそよぐ夜ごとに、その、竹の一節ごとに、目が覚めて、なんとなく物悲しいことよ。)

秋ごろ、そこを出発して、外へ移ってから、もとの滞在先の主人に、

b いづことも 露のあはれは わかれじを 浅茅が原の 秋ぞ悲しき

(どこであっても秋の露の情緒は変わるものではありませんが、あなたのお宿の浅茅が原の秋がしみじみ懐かしいです。)

[トップへ](#)

⑰継母の名のりを責める・将来についてはかない空想

継母であった人が、私の父が下った任地上総から名を取って、宮中に上がってからも上総大輔と名乗っていたのだが、他の夫と結婚して後も、なおその名を名乗っていると聞いて、父が、今は不都合だという由をいいやるといので私が代筆して、

天智天皇がましました朝倉の木の丸殿は遠い昔の話となりました。そんなふう
に、あなたが私と夫婦だったのも遠い昔になりましたのに、あなたはまだ上総
を名乗っているのですか。やめてください。

このような、取るに足りないことを思い続けるのを習いにして、物詣（ぶっけい、社寺に詣でること）をわずかにしても、しっかりと、人のようになろうとも念じられない。最近の世の人は十七八歳から経文を詠み、勤行（ぎんぎょう、仏教で精進すること）をもするのだが、そんなこと思いもよらない。

からうじて思いつくこととしては、「たいそう高貴で、姿形、物語にある光源氏のように美しくいらっしゃる人を、年に一度でも通わせ申し上げて、浮舟の女君のように、山里に自分は隠し置かれて、花、紅葉、月、雪をながめて、たいそう心細げに、見事な文などを、時々待っていて見ることなどしたい」などと、そんなことばかり思い続け、そうなりたいと、願うのだった。

[トップへ](#)

⑱父の常陸介拝命

親がそれなりの地位に立ったら、たいそう高貴なさまに私の身もなるだろうなど、ただあてにならないことを思って長年を過ごしてきたところ、親はかろうじてはるかに遠い常陸国の国司になって、「長年の間、いつか思っているように都に近い国の国司になったら、まず思う存分お前を大切に、任国につれ下って、海山の景色をも見せ、それは当然のこととして、自分自身よりも高くお前をもてなして、可愛がってやろうと思っていた。私もお前も前世の運命がつたいせいで、とうとうこんなはるかな田舎の国に赴任することになってしまった。お前が幼かった時、上総国に連れ下った時さえ、もし私が病気にでもな

ったら、お前はどうなるだろうと心配だったのに、ましてこんな田舎で私が死んだら、お前を露頭に迷わせることになるだろうと思うのだ。田舎暮らしの不便さを思うにつけても、わが身一つのことならば、なんとかなるものを、大勢の家族を連れて任地へ下り、言いたいことも言えず、したいこともできずなどあるのが、不憫だと心を砕いていたのだが、今はましてお前は大人になったのだから、任地に連れ下って、私の命もおぼつかない。親が死んだ後、都のうちに露頭に迷うのはよくある話。まして東国の田舎人として露頭に迷うのは、悲惨だろう。お前を京に残していても、お前を迎え入れてくれるしっかりした親類縁者があるわけでもない。そうはいっても、せつかく手に入れた国司の地位を辞退するわけにもいかないのだから、お前を京に残して、これが今生の別れともなりそうだ。都でしっかりした結婚相手を見つけてやった後にお前を京に留め置きたいとも思うが、それもおぼつかない」と、夜昼父がお嘆きになるのを聞く心地といったら、花紅葉を見る悦びもみな忘れて悲しくなり、たいそう思い嘆かれるけれど、どうしたらいいのか。どうにもならない。七月十七日に父は任地常陸に下ることとなった。出発前五日ともなると、顔をあわせるのもかえって悲しいのに違いない。私の部屋にも入ってこない。まして出発当日はばたばたして、出発の時となれば、さあお別れだということで私の部屋の簾を引き上げて、父と私と顔をあわせて涙をほろほろと落して、すぐに出発するのを見送る心地、目もくれまどいすぐに突っ伏してしまっただが、私とともに京に留まることになった下男が、途中まで父の見送りをして帰って来て、懐紙に、

b 思ふこと 心になかふ身なりせば 秋のわかれを ふかく知らまし

(私が思い通りにできる身であったなら、秋の別れをしみじみとかみしめるのだが、今はその暇もなく、あわただしく出発しなければならない。)

とだけ書かれているのを、涙に暮れて私は見る事ができない。平穩無事な時であれば下手な歌を書いたことなども思い出され、とにかく何を言うべきかも考え付かないままに、

b かけてこそ 思はざりしか この世にて しばしも君に わかるべしとは

(この世で父上とほんの少しでもお別れすることになるなんて、私は少しも思いもしませんでした。)

などと私は書いたのだろうか（悲しみのあまり、記憶がはっきりしていない）。人の訪れも減ってしまい、寂しく心細く物思いに沈みつつ、父は今どへんかしらと、明けても暮れても思いやる。あづまへの道も知っていることであり、はるかに恋しく心細いことは限りも無い。朝から晩まで、東の山際を眺めて過ごした。

トップへ

⑱太秦参詣・父の便り

八月ごろに太秦ごもりをするのに、一条大路を經由して詣でる道に、男車が二つほど止めてあって、物詣と一緒に来るらしい人を待っているようだ。通り過ぎて行ったところ、隨身めいた者を私たちの所によこして、

花見に行くと君を見るかな

（あなは花見に行くと見ましたよ。）

と言わせたところ、このような風流な問いかけには、答えないのも無粋なものでと一緒にいた人に言われたので、

千ぐさなる心ならひに秋の野の

（あなたは多くの女性に目移りがする浮気なお方。それだから、まじめに物詣に行く私のことまで、花見に行くだなんて思うのです。あなたと一緒にしないでくださいまし。）

とだけ言わせて行き過ぎた。

七日太秦ごもりをしている間にも、ただあづま路の父のことばかり思いやられて、物語に耽溺したわいなき妄想にひたることから、かろうじて離れて、「つつがなく父に会わせてください」と申し上げたのは、仏も不憫に思っ、お聞き入れくださるだろう。

冬になって、一日中雨が降り続けたその晩、雲を吹き払う風が烈しく吹いて、空は晴れて月がたいそう明るくなって、軒近い萩がたいそう風に吹かれて、碎け乱れるのが、たいそう不憫で、

秋の盛りを、どんなふうに思い出しているだろう。冬が深いので、嵐にもまれる萩の枯葉は。

あづまより父の便りを持った人が来た。

「神拝という儀式をして、国のうちをまわっていたところ、水が趣深く流れている野がはるばるとある所に、木が群がっている所がある、趣深い所だなあ、見せてやれないのが残念だと、まずお前のことを思い出して、『ここは何というところですか』と聞くと、『子しのびの森と申します』と答えたのが、身につまされてたいそう悲しかったので、馬からおりて、そこに二時（四時間）ぼんやりしていた。

とどめおきて わがごともはや 思ひけむ 見るにかなしき 子しのびの森

（お前もわが子をどこかに置いてきて、私のように悲しい気持ちなのか。見るも悲しい子しのびの森よ。）

と思った」

とあるのを見る心地は、言うまでもなく胸がいっぱいになる。返事には、

子しのびを 聞くにつけても とどめ置きし ちちぶの山の つらきあづま路

（子しのびの森の話を知るにつけても、私を京に留め置いてちちぶ山の向こうのあづま路へ赴任された父上のことを恨めしく思います。）

[トップへ](#)

⑩初瀬籠り。鏡に映った未来

・原文

かうて、つれづれとながむるに、などか物詣でもせざりけむ。母いみじかりし古代の人にて、「初瀬には、あなおそろし。奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はさる山、率て出でむいとおそろしや。親上（のぼ）りて、ともかくも」

と、さしはなちたる人のやうにわづらはしがりて、わづかに清水に率てこもりたり。それにも例のくせは、まことしかべいことも思ひ出されず。

彼岸のほどにて、いみじう騒がしうおそろしきまでおぼえて、うちまどろみ入りたるに、御帳（みちょう）のかたの犬防ぎのうちに、青き織物の衣（きぬ）を着て、錦を頭にもかづき、足にもはいたる僧の、別当とおぼしきが寄り来て、

「行くさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見ても、うちおどろきても、かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめてまかでぬ。

母、一尺（いっさく）の鏡を鑄させて、え率（ゐ）て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せたまへ」などいひて、詣でさするなめり。そのほどは精進せさす。

この僧帰りて、「夢をだに見で、まかでなむが、本意なきこと。いかが帰りても申すべきと、いみじうぬかづきおこなひて、寝たりしかば、御帳の方より、いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞきたまへるが、奉りし鏡をひきさげて、

『この鏡には、文（ふみ）や添ひたりし』と問ひたまへば、かしこまりて、
『文もさぶらはざりき。この鏡をなむ奉れとはべりし』と答へたてまつれば、
『あやしかりけることかな。文添ふべきものを』とて、

『この鏡を、こなたにうつれる影を見よ。これ見ればあはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを見れば、臥しまろび泣き嘆きたる影うつれり。

ものはかなき心にも、つねに、「天照御神（あまてるおほんかみ）を念じ申せ」といふ人あり。いづこにおはします神、仏にかはなど、さはいへど、やうやう思ひわかれて、人に問へば、

「神におはします。伊勢におはします。紀伊（き）の国に、紀伊の国造（こくぞう）と申すはこの御神なり。さては内侍所にすくう神となむおはします」といふ。

伊勢の国までは思ひかくべきにもあらざなり。内侍所にも、いかでかは参り拝みたてまつらむ。空の光を念じ申すべきにこそはなど、浮きておぼゆ。

親族（しぞく）なる人、尼になりて修学院（すがくいん）に入りぬるに、冬ごろ、

涙さへ ふりはへつつぞ 思ひやる 嵐吹くらむ 冬の山里

かへし、

わけてとふ 心のほどの 見ゆるかな 木陰をぐらき 夏のしげりを

・ 語句

■かうて 「かくて」の音便。 ■せざりけむ しなかったのだろう。後悔の念をあらわしている。 ■古代の人 昔かたぎの人。 ■初瀬 奈良県桜井市初瀬町。長谷寺が十一面観音信仰で有名。 ■石山 滋賀県大津市の石山寺。紫式部が『源氏物語』の着想を得たという伝説で有名。 ■関山 逢坂山。大津市の西。蝉丸の歌が有名。 ■鞍馬 京都市左京区鞍馬山の鞍馬寺。毘沙門天をまつる。 ■親 作者の父。 ■さしはなちたる人 ほったらかしにした人。放置した人。 ■清水 京都市左京区清水寺。都からとても近い。 ■例のくせ 物語に耽溺し空想にふけること。 ■まことしかべいこと 「まことしかるべきこと」の音便。観音様にお祈りしたり、経を読むこと。 ■彼岸

お彼岸。春分・秋分の日を中日にして、前後三日間。 ■御帳 仏前にたらし
た幕。 ■犬防ぎ 仏殿の区切りにおいた低い柵。 ■むつかりて 不機嫌に
なつて。 ■精進 身を清め魚肉などを避けること。 ■仏にかはなど 「思
ひ」が省略されている。 ■思ひわかれて 分別がついて。 ■国造と申すは
紀伊の国造と申すが崇め奉るは…といった意味の言葉が省略されている？ ■
国造 大化の改新・ネ前の世襲の地方官。 ■内侍所 賢所（かしこどこ
ろ）。宮中の温明殿（うんめいでん）。神鏡を安置している所。内侍（女官）
が仕えていたので内侍所という。また神鏡そのものを内侍所ということも。

・現代語訳

このように、なすこともないままにぼんやりと過ごしていて、どうして物詣く
らいしなかったのだろう。母はたいそう昔気質な人で、「初瀬はひどく恐ろし
い。奈良坂で人さらいにあつたらどうしますか。石山寺は、逢坂山を越えて行
くのでひどく恐ろしい。鞍馬はもちろん恐ろしい。お前を連れて行くなんて、
ひどく恐ろしいことですよ。父上が上京してこられたら、とにかくも…」と、
私をほったらかしの人のようにわずらわしがって、わづかに清水に連れて行っ
て籠った。それにも例の私の空想癖のせいで、本来やるべき祈願にも集中でき
ず、彼岸のほどなので、たいそう人が多く騒がしく恐ろしいとまで思われて、
うとうととまどろんだ所、御帳の方の犬防ぎの内側に、青い織物の衣を着て、
錦を頭にもかづき、足にもはいた僧が、この寺の別当と思われる僧が私に寄っ
てきて、「行く末どんな悲しい運命が待ってるとも知らず、そのようにたわい
もないことばかりに没頭して…」と、不機嫌がつて、御帳の内側に入ったと見
ても、目が覚めてからも、このような夢を見たことも人にも語らず、心にも思
いとどめず、清水寺を後にした。母は、直径一尺の鏡を鑄させて、私を初瀬詣
でに連れていけないかわりに、僧を代理人として立てて、初瀬に参詣させたら
しい。「三日籠って、この人（作者）が将来どうなるか、夢に見せてくださ
い」などと言って、参詣させたようだった。その三日間の初瀬籠りの間は、都
にいる私も精進させられた。この僧が帰って来て、「夢も見ないで寺を後にす
るのは不本意なこと。どうしても帰ってご報告するのだと思い、たいそう一生
懸命勤行して、寝たところ、御帳の方より、たいそう気高く清らかでいらっし
やる女性が、美しく衣装を着て、あなたが奉った鏡を下げて、「この鏡には願
文は添えてありますか」とご質問になるので、私はかしこまって、「願文はあ
りません。この鏡だけを奉れということです」とお答えすると、『奇妙なこと
であるな。願文を添うのがふつうであるのに』とて、『この鏡の、ここに映っ
ている影を見よ。これを見ればあわれに悲しいぞ』とってさめざめとお泣き

になる。鏡を見れば、伏しまろび、泣き嘆いている影がうつっています。『この影を見れば、たいそう悲しい。一方、こちらを見よ』

とって、もう一方に映っている影をお見せになる、多くの御簾が晴れ晴れしい感じで、几帳を押し出した下から、色とりどりの衣の裾や裳がこぼれ出て、庭では梅桜が咲き、鶯が木の間を鳴きわたっているのを見せて、

『これを見るのはうれしいことよ』とおっしゃった…そういう夢を見ました」

と、僧は語ったという。当時私は、その夢の中に私の将来がどんなふう暗示されているかなんて興味もなかったの、耳にも留めなかった。こんなおぼつかない私にも、いつも「天照大神（あまてらすおおみかみ）をお祈り申し上げなさい」という人があった。どこにいらっしゃる神だろう、あるいは仏だろうか、などと思い、そうはいつでも、だんだん分別がついてきて、人に質問すると、「神様でいらっしゃいます。伊勢にいらっしゃいます。紀伊の国に、紀伊の国造（こくぞう）があがめ奉っているのは、この神様です。また宮中の内侍所で守護神として崇められている神様でいらっしゃいます」という。伊勢の国まで出かけるなど、考えることもできない。どうして参詣できよう。できない。空の太陽を拝んでいけばいいかしらなどと、浮ついたことを考えていた。親族である人が、尼になって修学院（すがくいん）にこもった時、私は冬ごろその人に、

涙さへ ふりはへつつぞ 思ひやる 嵐吹くらむ 冬の山里

（涙までこぼれるほど、ことさらに貴女のことを思っています。冬の山里では嵐が吹き荒れているでしょうね。）

返事。

わけてとふ 心のほどの 見ゆるかな 木陰をぐらき 夏のしげりを

（生い茂った夏草を踏み分けて、あなたは私をわざわざ訪ねてきてくださいました。そして今また、あなたは冬のさなかに、私に文をくださいます、夏に訪ねてくださった時と同じ志が、そこに見えて嬉しいです。）

[トップへ](#)

②1 後の頼み

・現代語訳

(つらい運命であったが、) それでもやはり (私の) 命はつらさにも絶えることなく、生きながらえているようだが、死んだ後の世も、思い通りに (極楽往生することには) ならないだろうよと、不安であるが、頼みに思うことが一つだけあった。天喜三年十月十三日の夜の夢に (*)、住んでいる家の軒先の庭に、阿弥陀仏が立っていらっしゃる。はっきりとはお見えにならず、霧一重隔てたように、透けてお見えになるのを、強いて (霧の) 切れ間から拝見すると、蓮華の台座が地面から上がっている、高さは三、四尺ほどで、仏様のご身長は六尺ほどで、金色に光り輝いていらっしゃって、御手は、片方を広げたようになさり、もう片方では印を結んでいらっしゃるのを、他の人の目では見つけ申しあげず、私一人が見申しあげ (て、阿弥陀仏の御来迎を感謝す) るが、そうはいってもやはりひどくそら恐ろしいので、簾のそば近く寄っても、見申しあげることでもできずにいると、仏様が、「(あなたはまだ迎えに応じるつもりがないようだ。) それでは、今回は帰って、後に迎えに来よう。」とおっしゃる声が、私の耳だけに聞こえて、他の人は聞きとることができない、と (夢に) 見て、はっと目が覚めたところ (夜が明けていて) 十四日である。この夢だけを、極楽往生できるというあてとした。甥たちなどは、同じ邸内で、朝夕 (顔を) 見ていたのに、このようにしみじみと悲しいこと (= 夫の死) の後は、皆それぞれに別の所に移り住みなどして、誰も顔を見せることがめったにないのに、(ある) とても暗い夜に、年齢が六番目にあたる甥が訪ねて来たので、珍しく思われて、月も出ないで闇に沈んでいる姨捨山 (うばすてやま) のように、(夫の死後) 光明も見いだせず、悲観にしてくれているお婆の所に、(あなたは) どういうわけで今夜訪ねてきてくれたのでしょうか。と自然に口をついて出てしまった。

[トップへ](#)

参考資料

- ・菅原孝標の女の更級いちはら紀行

- ・ 田所真; 『更級日記』 と上総国府
- ・ 和田律子、福家俊幸編; 「更級日記上洛の記千年-東国からの視座」
- ・ ウィキペディア

以上